

# れきし散歩

## いしかわただふさかつちゅう 石川忠総甲冑 ～常設展示「亀山市の歴史」から～

### はじめに

歴史博物館の常設展示では、「亀山市の歴史」というテーマで、実物資料をはじめ図表や写真パネルを用いて、原始から現代までの亀山市の歴史を展示しています。今回のれきし散歩は、現在展示中の「石川忠総甲冑」について紹介します。

### 石川忠総甲冑



石川忠総甲冑



胴(甲)を形作る朱塗矢筈札と紺糸威部分

石川忠総甲冑は、亀山城主であった石川家にゆかりのあるもので、亀山神社寄託資料の一つです。

甲冑とは、胴(甲)と兜(冑)のことです。この甲冑は、胴を中心に注目したとき、その様式から「朱塗矢筈札紺糸毛引威二枚胴具足」と名前が付けられています。

「札」とは、鉄や皮で作った細長く小さい板のことです。甲は、札を糸で綴ることで形作られています。「矢筈」とは、矢を弓の弦に掛けるところです。よって「朱塗矢筈札」の意味は、札頭(札の上部)が矢筈の形をしており、その札が朱の漆で塗られていることを表しています。

また「紺糸毛引威」の意味は、札を威す(綴る)糸が紺糸とのことであり、毛引威は、威し方の種類です。

そして「二枚胴」とは、江戸時代に作られはじめた胴のスタイルで、前後2枚の胴を左脇の下の蝶番でとめた胴のことです。つまり、この蝶番を軸にして、前後の胴が開くようになり、着用した後は、右脇の下の紐で締めます。

一方、兜に注目すると、鉢の部分は、矧板を鋳で留めています。筋を数えると124筋ありますので、百二十四間筋兜という名前になります。

また、吹返しには、石川家を表す笹龍胆紋が据えられ、前立には、日輪という金丸板を立てています。



(左上) 上から見た鉢の筋

(右上) 矧板の鋳留



(左下) 日輪の前立と吹返しに据えられた笹龍胆紋

### 石川忠総と石川家の所替

石川忠総は、天正10(1582)年、(父)大久保忠隣、(母)石川家成の娘の二男として相模國小田原(神奈川県)で生まれています。

慶長5(1600)年、石川家の養子になり、同年の関ヶ原合戦では、徳川家康側に付いていました。

大垣城主であった養父の家成が死去すると、家督を継ぎ、大垣(岐阜県)、日田(大分県)、佐倉(千葉県)、膳所(滋賀県)の城主を勤めました。

忠総は、慶安3(1650)年12月に膳所で死去し、家督を継いだ孫の昌勝(後に憲之)が、徳川幕府による所替の命令によって、慶安4(1651)年に、膳所から亀山城主として入部しました。

その後、石川家は、淀(京都府)、松山(岡山県)の城主を勤め、延享元(1744)年、石川総慶のときに再び亀山城主として入部しています。

以来、明治になるまで、大名石川家は、亀山城主を勤めました。

### 真湊神社の宝物として

明治12(1879)年の「鈴鹿郡神社宝物古文書目録」(三重県神社庁所蔵)によれば、この石川忠総甲冑は、明治10(1877)年9月に、最後の亀山城主成之の養子で、家督を継いだ成徳が、「甲冑 朱塗切付小札勝色威シ」の名前で、石川家の始祖を祀る真湊神社(後の亀山神社)に寄付されたものです。